

慎一の青春、其の一

内田博司

登場人物

吉村慎一 十九才

鮫島桐子 二十八才

時

昭和三十三年～昭和三十五年

所

名古屋市 昭和三十三年

奈良県 昭和三十五年

プロローグ

この物語は日本の敗戦後五年から始まります。国民の大多数がまだお米を満足に食べられなかった頃の話です。貧しい家庭の子供達や大人が結核という亡国病に罹り全国に患者が溢れ、至る処待機患者が急増する騒ぎとなりました。丁度コロナが世界で遂に百万人の死者を出して更に拡大している現在と同じく、当時日本だけで百五十万人の死者を出した結核に対して厚生省は急遽生活保護受給患者を対象に成功率が五割という外科手術を推奨して待機患者の解消を図ったのです。主人公の吉村慎一も医療保護で千葉県の療養所にいたので当然外科手術を迫られました。受けなければ自宅に返され父親は薬代を稼ぐ為に又徹夜作業をしなければならず、と言って手術では到底生きて帰る自信はなかった。帰宅も出来ず手術も拒絶する慎一は遂に進退窮まりました。だが選択には半年の猶予が与えられ切羽詰まった慎一は当時母親の元へ足繁く通って入信を勧める新興宗教の定婆さんを出し定婆さんに入信を願い出たのです。定婆さんは所属本部へ事情を話し許可を得て其の返事をくれました。こうして慎一は昭和三十三年十月虎口を脱し慰安の為の映画「翼よ、あれがパリの灯だ」を上映している夜に紛れて療養所を脱走しました。行く先は名古屋でした。

一

名古屋へは明け方着いた。名古屋駅は大きく私鉄など色とりどりの電車が止まっていた。改札を出て定さんが送ってくれた支部教会への地図を取り出し構内を抜け東山動物園行きが何度も降りした。巨大な都市も終点ではさすがに慎一一人になった。途中の繁華街で浴って何処までも歩いて行くとやがて右手に大きな看板があった。「天道教千種大教会名古屋支部」と書いてあり坂道を登ってゆくと大きな玄関があった。

「東京の定さんに紹介されて来ました」

受付の若い信徒はビックリして奥へ引っ込んだ。広い畳敷きの隅に待っていると大分年を経たお婆さんが出てきてジツト慎一を見ていたが

「あなたの病気は贅沢病や、旨いものばかり食べてからにちっとも働かんと何もせんで息してるだけや、そんなもんにかかる人間は根性の腐ってる証拠やぞ、そんな人は人様の最低の仕事から始めるもんや、まず朝四時に起きて便所掃除しなさい、それから文句を言わんと真面目に働けばきつとようなる、今日から励みなさい、ええか」

それだけ言うと言ってしまった。奥の方に神殿と左右に格式のある社が並び神楽の道具が置かれていた。やがて当主の娘さんらしい年配の人が現れた。

「あんたよう来らしたね、定さんが心配しとったであとで手紙でも出しときなさい」

慎一は「はい」と返事をし頭を下げた。

「さっきの人は私のお母さんで教会長の奥さんなんやで、毎日のことは私が担当だで、何でも相談しなさい」

と奥へ引っ込んだ。代わりに事務担当が現れて本殿の裏へ案内した。八畳の畳敷きに押し入れがあり壁際に十個程のロッカーが並んでいた。

「布団は押し入れでロッカーは空いているとこ使って。これから君の仕事場へ行くで」

渡り廊下を通って長い洗面所の奥に十五基の便所と男子小用のトイレ棟があった。枯れ葉が舞い風がふき抜ける木造の建屋だった。これが慎一の最初の仕事場だった。

殺風景な眺めだった。療養所と余りにも違った風景に身震いがした。それでも行く宛てもなかった自分に此処が新しい身の置き所だと思わす定さんの親切が身にしみて嬉しかった。

夕方になって神殿に信徒一同が集められた。教務担当が慎一を皆なに紹介した。慎一は頭を下げて「よろしくお願いします」と挨拶した。

その日から慎一は修養課の学生となった。修養課は三十才の緒方さんを始め二十六才の加藤さん、二十二才の宗方さんと慎一だった。年の差もありそれぞれ事情を抱えて此処へ引き寄せられた人達の暗黙の了解は不干渉だった。一切の出生、門地、経歴については関せず、がルールであることが一緒に寝起きする内に分かった。それ以外は明るく親切で協同作業にも障害はなく円滑に生活が進んでいった。

しかし朝四時はさすがに辛かった。仲間を起こさないように静かに部屋を出て便所に向かった。異様な静けさだった。箒で掃いた後雑巾掛けだが踏み板に荒目の鉋掛けしかしてないので雑巾が板目に引っかかり滑るようには雑巾が走らなかつた。つい絞りをゆるめて拭くと水がビッシヨリ残って気持ち悪くもう一度拭き直さなければならなかつた。一番困ったのは汲み取り式なので板の下は文字通りの便壺だった。そこから這い上ってくる風がヒヤリとして首筋に纏わり付くのが気持ち悪かつた。それが十五基もあるので時間がかかる上に踏み板に粗相もあるので別の雑巾を用意しないと清掃にはならなかつた。思わすこんな仕事と腹立たしくなり舌打ちしてしまつた。しかし次の瞬間こうしてられるの

も定婆さんの御陰と思うとあわててそんな気持ちを打ち消した。

七時になると勤行が始まった。教務担当の読経に続いて皆な声を上げて経を読んだ。この時は気持ち一つになるので気分が高揚して気持ちよかった。

七時半に食事が始まった。全員アルミ食器だった。飯粒よりサイコロ状のサツマイモばかりが目立ち味噌汁は大根の葉っぱだった。オカズはオカラと漬物は大根だったので慎一は味噌汁を御飯に混ぜてかき込んだ。協会長の奥さんは慎一のことを「旨いものばかり食べて」と言ったが此処も東京と変わりなかった。

慎一一人が学生服なので緒方さんがロッカーから作業服を引っ張り出してきて「これに着替えや」と渡してくれた。長靴を履いて後についてゆくと神殿の裏は見上げるような山だった。その山を崩して谷底を平らにするのが修養課の仕事だった。この山を均すなんて何年かかるかと思うと目眩いがあった。

慎一は本当に生きて帰れるだろうかと恐怖を感じたが、これが自分の行き着いた道ならばと観念した。病気のことは仲間には話していないので簡単に死ぬわけにはいかない。慎一は怠けていると思われぬ程度の歩調で動作だけは休まずに作業に取り組んだ。喉が渇くとヤカンから水を飲み猫車という車輪が一つの台車に土を入れては谷へ投げ込む単純な動作の繰り返しを一日中続けた。働いている間はとても辛いのだが続けている内にリズムが生まれ何故だか満たされた気分になってきた。

それは不思議な感覚であった。

労働は激しい疲労で猛烈な空腹に襲われた。肉が欲しかったが出されたものは野菜と漬物でたまに魚が出てくると夢中で食べた。疲れているので食後の読経と經典講義は眠くて仕方が無かった。夜は九時に寝たが朝はキッチンと目が覚め便所掃除も要領を覚えて生活のリズムが出てくるといつしか病気のことは気にならなくなっていた。栄養が本当に足りないと思う時は療養所の安藤さんがくれた栄養剤をのんだ。ただ栄養剤は大事なので母親に少しばかり金の無心をした。暫くして母親から現金書留が届いた。慎一は緒方さんから聞いた近くの乾物屋へ行き鯨のベーコンとニンニクを買いカミノリでニンニクを細かく切ると噛まずに呑み込んだ。たちまち体内が熱くなり元気が出た。そうやって病気には細心の注意を払っているためか体調は悪くなかった。しかし決して油断は出来ないので毎日脈拍を測ったり昼休みも安静にして体調維持に努めた。

二

仰天の名古屋生活もどうか慣れた頃初めて父親に手紙を書いた。定さんの御陰で新しい生活にも慣れ病気も大過なく元気で暮らしています。どうか心配なくそちらも身体に気をつけて下さい、と書いた。

毎日挑んでいる山は一向に削れた気がしないが谷には少しずつ土が盛り上がって来てそれを均すときに達成感が湧き仕事の励みとなった。

一ヶ月経った頃若奥様から

「便所はキレイになったね」

「有難うございます」

「言われたことは全てが修行なんだから黙って励みなさい」

「はい」

「今日から便所の他に風呂番もやってみなさい」

といわれた。神殿の横の教会長宅に直結して大きな風呂場があった。重油式のボイラーで炊くのだが布教師が操作を担当していたが引き継ぐことになった。土木作業を四時で切り上げると風呂場に来て油量を確認しボイラーに点火し自動の温度調節を監視する仕事だった。止めるのは九時で就寝時間になるがその作業を終えてから寝ることになった。そのかわり重労働の一時間切り上げが許されたのでそれが何より嬉しかった。操作室でボイラーの操作を自動式に切り替えておけば後は機械が監視をしてくれ異常があれば警報で知らせてくれる。この部屋は教会長宅につながっていて若奥様から弟の部屋の本は自由に見て良いと許可が出ているので弟さんの部屋に入った。弟さんは大学生で本棚に本がズラリと並んでいた。慎一はそこから岩波書店の「芭蕉文集」を取り出すと操作室に戻り熱量を監視しながら読み耽った。野ざらし紀行を読んで芭蕉の心が慎一の心に滲みだした。誰も知らない名古屋の天道教の風呂場でこうしている自分にしみじみと寂しさが湧いてきた。

そして冬が来た。教会の正月は慎一にも人並みに素晴らしい経験を与えてくれた。着飾った信徒さんが朝から引きも切らずやって来ては参詣を済ませると神殿前の広場に慎一達が昨夜から構築したテントの畳に座ってお雑煮を食べると嬉しそうに帰って行った。大晦日に修養生と炊事班が代わる代わる餅をつき北海道の昆布と高知の鯉節と煮干しで出汁を作りテントの横に並んで炭火で顔中真っ赤にしなが餅を焼いた。隙を見つけてはその雑煮を食べた。こんな旨い雑煮を慎一は食べたことが無かった。名古屋の大きな自動車社が毎年寄付してくれる進物だった。

しかし二月になると朝の便所掃除は辛かった。雑巾が凍って水道も出ない日があった。その時は風呂場から残り湯を汲んで作業をした。朝食が終わって山崩しの作業の前に若奥様に呼ばれた。

「どうだね、この生活にも馴れたでしょう」

「はい」

「今度は奈良の専修科に行つてきなさい、全国から人が集まるので揉まれてくるとええが」

「えっ、すぐですか」

「すぐに決まっとるがや」

「はあ」

「人はなあ面と向き合ったら互いに挨拶するのは当たり前やで」

「はい」

「だけんどな本当に偉い人間に会ったら通り過ぎた後ろ姿に頭がさがるんやで」

「はあ」

「そうゆう人に会ってこやあ」

「はい」

「信仰は心だで、また心が定まればまたその先があるがや」

慎一は若奥様の顔を眩しそうに仰いで「はい」と言った。慎一に何故かしら大きな期待が

膨らんだ。是まではその日、その日を生きるのが精一杯だった。しかしこの一年を振り返ると自分でも分からない大きなものに動かされているような気がしてならなかった。その大きなものが何なのか慎一には分からなかったが、その風に吹かれていつの間にか病気を忘れていることに気がついた。あれ程「死」を恐れて翻弄されていたのに今ははっきりと自分という存在を自覚して考える日が多くなった。

急に千葉の看護婦安藤静子が頭に浮かんだ。栄養剤をくれた上東京駅まで送ってくれた時を思うだけで胸が熱くなったがようやく身体を動かせる今ではそれ以上に焦がれる程胸が締め付けられた。一緒に歩いた道や映画を見た時の一コマ、一コマが想いだされて来るのであった。護国神社のお守りもバッグに仕舞ってある。慌ただししい東京駅での別れから慎一は今再び名古屋を離れようとしていた。

寒気がひとしお深まった二月末、慎一は奈良に向かう車中にいた。山科を過ぎ鴨川を渡ると京都である。修学旅行で来た以来だがすぐ奈良線に乗り換え午後丹波市に着いた。

市全体が宗教都市だった。藍色の法被を着た信徒が大勢行き来していた。軒を接する店も法具、祭具を並べていた。やがて長い塀に囲まれた広大な門を潜ると重厚な瓦屋根の館が建っていた。玄関で入学証を渡した。係員が長い廊下を先導して六畳ほどの部屋に案内された。それが専修科の寮だった。そんな部屋が遙か向こうまで続いていた。部屋には四つの机があった。畳に座り、机に手を置いてみた。ヒヤリとした感触が伝わってきた。

百人は入れる食堂で互いを知る間もなく食事を摂った。その後大広間で就学の説明があり相部屋に戻ると二十代そこそこの三人が集まった。大阪と岡山県と東京の慎一だった。それぞれの出身地で同じような経験をしている者達だった。

翌朝、法被姿になった一同は二十人ずつ隊列を組んで教育学館に向かった。学校と変わらぬ風景だった。三十人ずつに分かれて教室に入った。机の上に五、六冊の本が置かれていた。本をめくったりしていると法衣を着た教官が入ってきて教壇の前に立つと大きな声を張り上げた。

「信仰は教義と実践を通して神の真義に触れることで生きる指針とすることです」

慎一は静かに聞き入った。

窓に朝の光が射してきた。

三

翌日からは毎日弁当を持って隊列を組み街中の教育学館へ向かうと商店や民家の人々が気さくに挨拶してくれた。こうした日常が慎一には当たり前のように溶け込んできた。

こんな暮らしが療養所にいた時より徐々に病気への不安を薄れさせ一日を爽快な気分でも過ごせるようになった。この驚くべき変化に自信が湧いてきた。

ただ身体の不安が薄れてくると同時に是を一生の仕事に出来るのか、本当に自分はこの教えに帰依しているのか、と言うことが今ひとつ信じられないでいる自分の存在に気づき始めてきた。

金曜日は実践道場の日だった。今は田植えの真っ盛りだった。慎一は米作部門担当の指示で苗を持っては田に入り一株ずつ苗を植える作業に従事した。ひと畝植えるだけで汗ま

みれになったが気持ちよかった。身体一杯に生きる喜びが漲ってきた。こんな生活もいいなあとしみじみ思った。休憩時間になった。

畦道に腰を掛けて休んでいると目の前の道を頭陀袋を提げた托鉢の僧侶が通りかかった。慎一は思わずその様子を眺めていた。

僧侶は大きな農家の入り口を覗いた。誰も出てこない。横から箆を腰にのせてその家の家人が出てくると

「昼日中百姓の家覗いたって誰も出てくるもんはおらんで、皆な働いているんやから」

慎一にもその声は聞こえた。托鉢の僧侶はしきりに恐縮しているふうに見えた。家人は脇から小さな袋を突き出して

「これ少しやけど持っていき、小豆やけどアンコにして食べたら旨いで」

「有難うございます」

僧侶が答えた。

「そうやって一人で歩いてんのも疲れるやろ、箆の上で寝ていたらどや」

「いや、とんでもないです」

「怒られるのか、そんなこと疲れたら休んだらええのや」

「玄関先ですみませんけど一寸食事させて貰えませんか」

「飯まだやったん、ほなお茶入れたげる」

と奥へ入ってゆく。僧侶は座ると頭陀袋に小豆を入れ、竹皮に包まれたおむすびを取り出し口に入れた。僧侶はお腹が減っていたのかもぐもぐ食べた。

家人が盆にお茶と漬物を載せて出てきた。

「ほな、お茶のんでお天道様に感謝して御飯食べや」

「有難うございます」

家人は空を仰ぎ

「ええ天気だこと、有り難いこつてすなあ」

そう言うと奥へ消えた。

慎一はずっと見ていて僧侶が食べ終わった頃を見計らって声を掛けた。

「ご苦労様です」

三十過ぎの僧侶はフト見て天道教の人と分かると

「これは奇遇ですな」

慎一は興味を持って尋ねた。

「何故ですか」

「私は一瞬前迄あなたを知らなかった。それなのに今こうしてあなたと話をしている」
「そうですね」

「これが縁です。三経義疏に曰く、会い得ずして既に会うことを得たり、私とあなたは今縁をもって結ばれたのです。その先どうなるかはわかりません。ただ私達は仏の縁をもつて会う筈もないのに会えたと言うことです。お大事に」

僧侶はそう言うのと立ち去った。慎一は何が起こったのか掴めずに僧侶の後を目で追っていた。僧侶は一体何を言いたかったのだろうか。

四

慎一は丹波市の街が好きになった。ここにいるといさかいというものを見たことが無かった。自分の両親は毎日暮らしのことで喧嘩が絶えなかった。そのことが慎一にはとても辛かった。生きていることが何故楽しみにならないのか。慎一はここにいる御陰で悦びすら感じていた。こうして一生暮らせるならこれ程幸せな人生はないと思った。

日曜日になった。慎一は食堂でひとり朝食を食べた。同室の二人は既に出かけていた。大阪出身の木村太一さんは家業が燃料、氷室業だが石油の進出で採算が取れず日曜日毎に帰宅しては家族で将来の相談をしていた。もう一人の近藤敏夫さんは岡山出身で慎一より二才年上だが姉と共に美容院を経営する母に勧められ美容学校に通っているが休学して此処に籍を置いている。理由は美容師でいいのか離婚した父親と相談したいらしい。皆なそれぞれ事情を抱えて生きているのだ。

慎一はこの間会った僧侶に謎のような言葉をかけられて別れたことが気になっていた。正に禅問答をかけられたままなので会いに行こうと思った。宗教の道は違うがあの人と言った「縁」についても少し聞いてみたかった。道順はその時間聞いて漠然と想像がついていた。今歩くことがとても気持ちよかった。街は道路一本外れるとそこには水田や農地が広がっていた。田には光を受けて稲が勢いよく育っており蛙が泳いでいた。のどかな風景は慎一の心を弾ませた。目指す寺は深閑としていて参道を進むと頭に手拭いを巻きザルを傍らに置いて雑草を摘んでいるこの間の僧侶を見つけた。挨拶をするのにこやかに作業を止めて「又会いましたねえ」と言った。

慎一がこの間の続きを聞きに来ました、と言うとザルを持ち庫裏の入り口で手を洗うと傍らの縁台に腰を下ろした。慎一も並んで座ると

「生も一時のくらいなり、死も一時のくらいなり、たとえば冬と春のごとし」

僧侶は経で鍛えた喉で鮮やかに口唱した。慎一が感心していると

「もし生命というものがあるならばこの現実の世界においてこそ一瞬、一瞬を充分に生きること、それが今ですよと教えている」

それだけ言うとは僧侶はニコニコして慎一を見つめた。そして

「君は今迷っているのじゃないか」

そう言われて慎一はドキツとした。何故か心の底を見透かされた気がした。

「まあいい、決めるのは君だ」

言葉を継がないでいると僧侶は

「停留より飛翔、又会おう」

といって庫裏の中に消えた。慎一は頭を下げるとゆっくりと寺を後にした。

「生も一時のくらいなり」と心の中で繰り返した。

夕暮れの田園風景は甘やかな風が鼻をくすぐった。

慎一は次の日からおだやかに授業についていった。頭が一杯になると次の休みには電車に乗って奈良に行った。

奈良はもつと好きになった。志賀直哉の家とか、小林秀雄の泊まった宿屋、特に好きなのは興福寺の北円堂だった。そこには運慶の彫った無著、世親像がありこの二像を見ていると人間の悲しみを乗り越えた諦観がジワジワと寄せてきてそっと包まれる感じがするのであった。この揺るぎの無い静けさが慎一にはたまらなく魅力的だった。街がこれ程に深く慎一を引き込んでくれるのに実は慎一の心は揺れていた。

五

慎一は僧侶の言葉がよく理解出来ないことに悶々として日を送った。早朝参拝には誰よりも早く出かけて無心になつて読経を続けた。朝の行列登校もそして授業も姿勢を正して臨んだが心中は揺れ動いていた。今日の一時間目から「天道史」だった。名古屋時代から何度も読み継いできた教科書だった。頭にこびりつく程覚えていた。

急に不埒な考えがよぎった。同じことを学ぶのは時間の無駄だと思った。それより新しい冒険がしたかった。フト決められていることに逆らいたくなつた。手提げを持つと教室を出た。そのまま学校を後にした。商店街を抜けて気がついたら丹波市駅に来ていた。躊躇することなく帯解駅までの往復切符を買った。ホームを歩いて停まっている電車に乗った。急いで法被を脱ぐと手提げにしまった。

遠くで蒸気機関車に給水しているのか排気管から勢いよく蒸気を吹き出していた。慎一は自分の心の裡と同じだと思った。蒸気は風に吹かれて空に消えていった。そのうち電車

が動き出した。走り去る風景を見てみるとすぐ帯解に着いてしまった。こんなに早く着くとは思わなかったのにぐずぐずしている間に電車は動きだしてしまった。もう引き返せないと思った。奈良に着くといっそもっと遠くまで行きたいと思ひ、とうとう京都迄乗ってしまった。

京都駅に着いた。慎一はホームに降りた。修学旅行で金閣寺へ行ったことがまざまざと蘇った。あの時考えたことがそのまま未解決だったことを思いだした。大きな池の畔に二層と三層が全て金箔で張られた足利義満の居室であり政務の拠点が陽を受けて燦然と輝いていた。足利とはどんな時代だったのか空想の翼がどんどん広がっていった。やがて応仁の乱が長く続いて世の中は乱れるのだが其の時代の終わりにはどんな文化が遺されたのか知りたかった。慎一は構内の案内所を訪ね理由を話した。職員は何冊も資料を調べて答えてくれた。それが竜安寺だった。竜安寺。慎一は行ってみたいと思った。慎一は市内の観光案内を貰い交通経路を聞いた。

市電が走っている通りまで来て始めて駅を背にして前方の広い通りを眺めた。ガイドブックを取り出すと教えられた京福電鉄四条大宮があった。慎一は長い西本願寺の塀沿いを四条を目指して歩いた。

四条大宮駅から帷子ノ辻で乗り換えて北野線を竜安寺道で降りた。竜安寺は鬱蒼と立ち並ぶ樹林の奥にあった。厚い油塀に囲まれた広い白砂の庭に小さな、あるいは大きな石が点在していた。それだけだった。絢爛とした金閣の時代の十年後に物言わぬ石だけが転がっていた。しかしこの石が雄弁に語りかけてきた。

あの僧侶の身に纏った「一切無一物」の権化が此処にある。十年を超える室町の応仁の乱がもたらした結果だった。慎一は方丈の階に座って石庭と一時間以上対座した。

そして元来た道を帰った。寮の夕飯には間に合った。

慎一は布団に潜って竜安寺の庭と修学旅行の時見た金閣寺とを繰り返し思い描いては時代がもたらす変化について考えた。

慎一は托鉢の僧侶を再び訪ねたいと思った。今慎一の心に芽生えている考えに直接答えてくれるのはあの僧侶以外にはいない。慎一は毎朝列を作って登校しながらそんなことを考えていた。

六

又、金曜日 came。今日はすくすくと育ち始めている稲田から余分な草を排除する作業だった。根気と努力が求められた。慎一が作業着に着替えていると寮生から「場長が呼んでるよ」と声をかけられた。恐る恐る事務所に入ると服部場長が向かい合う椅子を勧めた。

「勉強は進んでいるかい」

「はあ」

「君は名古屋で既に学んでいるから授業は退屈だろ」

「そんなことはありません」

慎一は内心この間の授業をサボったことを咎められるのではと思った。ところが意外なことを言われた。

「君に一つ挑戦して貰いたいことがあってね」

「ええっ」

「信者の娘さんがね君と同じ病気で長いこと患っているんや」

慎一は更に驚いた。病気のことは名古屋の協会長家族以外話していなかった。

「はあ」

「そのことを母親が嘆いていられるんだよ」

「そうですか」

「まあ、母親の気持ちをなんとか汲んでやって欲しいんだ」

慎一はやはりサボったことを咎めているのだと直感した。それではなくては病気のことを持ち出す筈はない。その上こんな難問を自分に当てるわけではない。第一その為の時間を事務所に届ければ授業免除をしてくれるというのだから極め付きも甚だしいと思った。しかも報告もいらないと言われた。それでは嘘でもそう言えば何でも出来るではないか。慎一は試されているのだと考えた。

そこで慎一はその日から「天道史」を一番前に座って真剣に講義を受けた。

三週間経って始めて事務所に届け出てその家へ行った。

その家は商店街の途中にあった。普通の神具店だった。昔ながらの豪華な仏壇の反対側には神式の神棚や神具が所狭しと並んでいた。ガラス戸を開けて慎一は声をかけた。奥さんが出てくると「まあまあ済みませんね、横から奥へ入って下さい」と脇を指さした。言われるまま左隣の商店の間を進むと玄關があった。既に戸は開いていて式台に奥さんが座っていた。

「ようこそ来て下さいました。待っていましたんや」

奥さんはそのまま奥の応接間に案内した。ガラス戸越しに板張りの扉に囲まれた庭が見えた。楕が枝を張って下には灯籠があり池には鯉が泳いでいた。

奥さんが茶を入れながら

「お若いのね、もつと老けた方が来ると思ってたんよ」

「はあ」

「それでお体はもうええの」

「お陰様で丈夫にさせて貰いました」

「そうやてね親神様の御陰やね、家の桐子も頼みます」

「僕で良いんでしょうか」

「ええ、黙って言われた仕事を黙々とやり遂げたやて」

「いや、夢中でやって来ただけです」

「それを桐子に伝えて貰いたいの、ほな頼みます」

そのまま二階の桐子さんの部屋へ案内された。階段を上がると小間があり突き当たりがトイレで窓側に台所の一式が並んでいた。更に直接一階を経由しなくても診療が出来るように路の右側から扉をはさんで広めの外階段が付いていると言った。「じゃあ後はお願いね」と奥さんはそのまま内階段を降りて行ってしまった。

慎一は困惑した。どうして良いか分からなかった。服部さんからは「お母さんの気持ちを汲んでやって欲しい」と言われたけどそれを自分が出れるのか分からなかった。すると部屋から声がした。(話ながら桐子登場)

「そこで何してるの、入りなさいよ」

若い声が出た。慎一はゆっくりとドアを開けた。

セーターに作務衣の格好をした女性が椅子に座ってジット慎一を見ていた。

「お邪魔します」

慎一が挨拶した。学校に通っている女の子かと思っていたのに二十代後半の女性で一瞬たじろいだ。

「服部さんからなんと言われてきたの」

「はい、お母さんの気持ちを汲んでやって欲しいと」

女性は声を出して笑った。

「正直で良いけど少し間が抜けてへん」

「はあ」

「私のことは何て言ってたの」

「病氣して弱ってるからと」

「そお、それであなたに何が出来るん」

「えっ、僕ですか」

「だって、白馬に跨がり助けに来てくれはったんやないの」

「いやあ、そんな積もりじゃないんです」

「ほな、何しにきたん」

「はあ」

「そんなん、あかんやないの」

「そうですか」

「そりやそうやる、人助けなんやからもっと考えてくれなあかんやないの」

「はあ、失礼しました」

「今度は外階段から直接ブザー鳴らしてきてや」

「はい」

それだけだった。慎一は面食らって飛び出してしまった。人と会っていきなり能力を問われたことも初めてだった。ボクシングのパンチを受けたような衝撃だった。千葉の安藤静子さんは同年配でも看護婦なので優しく接してくれたのに桐子さんは冷静で隙がなかった。慎一は商店街を打ちのめされたように帰路についた。

服部さんに報告することは何もなかった。報告を求められてもいないので普通に隊列を組んで学校に通った。教室についてもずっとこの間の会話を反芻していた。

「それであなたに何が出来るの」

その答を見つければならない。その事だけが頭を支配していた。それだけは人に相談せずに自分で答を探さなければいけないと思いつながら寮に帰った。

夕食を終えて部屋に戻ると同室の三人はいつもの定位置に座った。近藤さんは父親とは暮らせないからもう一度母の元で美容師をやるしかないと言い、木村さんは家業を廃業してサラリーマンになるしかないと話した。木村さんは慎一を指して「若いお前が一番恵まれているな」とからかわれた。皆、世の荒波に揉まれて此処に辿り着いたのだ。それなのに慎一はまだ自分の進路どころか桐子さんから難詰されて答すら見つけられないでいた。消灯後すぐに二人の寝息が聞こえてきたが慎一は寝付かれなかった。

七

次の金曜日は農場を欠席してしまった。服部さんに報告することは何もしてないのに顔を合わせるのは苦痛だった。当てもなく商店街を歩いているうちに足は鮫島神具店に向かっていた。

慎一は真つ直ぐ歩いて行った。神具店に近づくのと店の前を通るのが嫌で右側の階段を忍び足で上がった。インターホンを押すと暫くして「誰？」と声がした。「あの」と言いかけたら間を置かず「入って」と返ってきた。

ドアを開けると「どう？答えを持ってきた」といきなり浴びせられた。

「はあ」

「楽しみにしてたの」

「お店にリヤカーが見えたので」

「リヤカー？」

「名古屋にいた時会長の奥さんから働けと言われました」

「それがどうしたん？」

「働くとは傍の人を楽にさせること、それでお嬢さんを」

「お嬢さんは止めて」

「はい、桐子さんをそれで病院の行き帰りに」

「いやや止めてよ、それやったら私が荷物見たいやないの」

「そうすればお店の人が助かると思って」

「ほしたら私は厄介者と同じやないの、今迄だってそんなことして貰わないし」

「いえ、そんな積もりじゃ」

「まあ本当のことやね、あんたは使用人の苦労を見かねたのやね。立派やわ」

「済みません、出直してきます」

またも慎一は後も見ずに部屋を飛び出した。桐子さんは驚く程素直だった。

慎一にとっては桐子さんを助ける使用人の労力を自分が肩代わりすれば桐子さんが感じている負担が少しでも軽減できると思つての発言だった。

最初の挑発的な桐子さんの態度が一変に神妙な表情に変わっていた。この極端な変わりように慎一自身も驚いてしまった。怒つてくれるならむしろ相手の気持ちを理解できるように慎一は桐子さんの深い悲しみに触れた気がした。

ただ一瞬どうして良いか分からなかったのだ。それで飛び出してしまった。その時慎一は始めて桐子さんの顔をシツカリと見た。それまではポンポンと景氣の良い言葉であしらわれるので顔を見る暇もなかったのだ。その顔には哀しみが滲み出ていた。

慎一の心を激しく動かすものがあつた。この気持ちは一体何だろう。

桐子さんは白いうなじにかかるほつれ毛をそつと掻き上げながら長いまつげを伏せてまるで泣いているようだった。慎一はその様子をほつきりと目にとめた。

慎一はグルグル商店街を歩き続けた。気持ちの整理が付かなかつた。今迄は農場の服部さんに命じられるままに動いていたに過ぎなかつた。ただ「お母さんの気持ちを汲んで病氣の娘さんを元気づけて」と言われて素直に訪ねて来ただけに今は完全に違つていた。あんな慎一の軽い応答に一変に表情を曇らせる桐子さんのナイーブな心の変化に事実戸惑つていた。これは初めての経験だった。千葉の安藤静子さんの時は二人とも澁刺として気持ちも弾んでいるばかりだった。それが今は相手の心の暗い影に触れて自分の感情が揺れ動いた。その衝撃を与えたのが慎一であつたことがなおさらこたえていた。慎一は動揺を抱えたまま学校のスケジュールに従がうことで気を紛らわせた。

だが頭の中は桐子さんのことで一杯だった。数日後夕食を済ませるとジツトしていられなくなつて農場へ行つた。服部さんを訪ねると家人が牛舎にいと教えてくれた。服部さんは奥の囲いにカンテラをかざして注意深く牛を観察していた。慎一が近づくと

「こんな時間にどうしたんだい」

「はい、神具店のことで一寸」

「桐子さんに何か言われたのかい」

「いえ、僕が失礼なこと言つてしまつて」

「あんたがかい、そりや珍しいことだな」

「服部さんは僕のことどう話しているのですか」

「あんたのことは病気を抱えてよく頑張つていると伝えてある」

「僕はまた学校へ行つている小さな子だとばかり思つていたから」

「そうか、それで面食らつているのか」

慎一はこれではつきりと服部さんは名古屋の教会から自分のことを知らされていることを確信した。更に京都市のこともおそらく知らされているのだろうと考えたがその事を話す気にはならなかつた。

「是非、桐子さんのこと教えて下さい」

そう聞くと服部さんはお茶を飲みながら掻い摘まんで経歴を話しだした。

「桐子さんはなあ、戦争中学徒動員で毎日紡績工場で落下傘を作らされたんや。しかし負け戦が続くと今度は秘密指令で風船作らされてなあ、それで敗戦や。やっと家に戻れても今度は家の商売の為に京都の繊維工場の跡継ぎに望まれて嫁に行かされた。協会員は誰も法被を着るからね法被を縫製して全国の教会支部が集まっている此処で注文を取れば毎年受注されるってわけや、御陰で店は繁盛して桐子様々と言われた。ところが良いことばかり続かないのが世の常でね、一年して桐子さんが病気になってしもたんや、学徒動員の疲労が響いたんだねえ。そうしたら婿が余所に子供を作ってしまったてね、桐子さんはきっぱり離縁して戻って来たつちゆうわけや」

「そうだったんですか」

「桐子さんはなあ日本の戦争の歴史とピッタリ重なり合うんや」

「そりゃあ大変でしたね」

「あんただって戦後の食糧難が原因で教会に来たんやろ」

「はい」

「それがこうして此処で勉強してられる程になったやないか」

「ええ」

「その不思議な功德を是非桐子さんにも分けて欲しいんや」

「でも僕なんかにそんな力はありませんよ」

「なんで」

「だって桐子さんに比べたら何処かの馬の骨もいいところですよ」

「阿呆、あなたの病氣回復は奇跡と言っても良い位功德の高いもんなんや」

「そうでしょうか」

「当たり前や、それをうまく人様に伝えられるか否かが教導師の勝負なんや」

「はい」

翌日、慎一は理髪店に行き頭を丸坊主にした。昔から男は謝罪をするときはそうやって片を付けることを知っていた。

〔十分休憩〕

八

慎一の心に火が点いた。桐子さんの話が幾度も慎一の頭を巡った。今迄は請われて使命を果たそうと思ったが今はすすんで桐子さんの回復に手を貸すことに変わっていた。それと同病の親近感から痛みや悲しみが直に分かるので他人とは思えない愛しさが湧いてきたのである。一度寮に戻り夕食を済ませると真つ直ぐ桐子さんの部屋に向かった。

外階段を登って力強くインターホンを鳴らした。「僕です」と言うとすぐ「入って」と返ってきた。丸坊主をみると桐子さんは可笑しそうに笑った。

「服部さんから桐子さんのこと聞きました」

「あら、なんて」

「落下傘の話とか」

「ああ、女子挺身隊で国に御奉公した話や」

「僕も毎朝天皇陛下の御真影に手を合わせて学校に行きました」

「あら、あなたにもそんな経験あるんや」

「国民学校一年生で親戚に学童疎開しました」

「へえそうやった。それにしても敗けるなんてね」

「米が買えなくて毎日トウモロコシを粉にして食べてました」

「そうやったわねえ戦後は」

「それで結核になって父親は薬代を払う為に徹夜迄始めて」

「そうか大変やったね」

「仕方なく実家がある区役所に医療保護申請して療養所へ行きました」

「そうか」

「そのうち患者が増える一方になって薬では間に合わないから手術しろと言われてたけど、成功率が五割もなくてわね自分が生き残る自信は無いし家へ帰れば父が共倒れだし」

「ほな、どうしたん」

「名古屋の天道教支部へ逃げたんです」

「へえ、それで病気は」

「毎朝四時から教会の便所掃除と山を削る作業を一年間やったらよくなってきて」

「一年も」

「一年も」

「ほんま？」

「ほんとです。とても不思議」

「そんなことってあるんや」

「だから桐子さんにもその不思議が伝わるように」

「嘘であつても嬉しいわ」

桐子さんは慎一をまじまじと見つめてポツンと言った。

「私達って世間から見ればはぐれ者もいいところね」

「えっ」

「みんな一生懸命働いているちゅうのに」

「仕方ないですよ」

「生きてるのになんの役にも立たへんなんて」

桐子さんは口をつぐんだ。慎一はそれを見て思わず強い愛情に変わるのに気がついた。桐子さんは自分の身体を抱き締めながら

「とつても寂しいわねえ」

と涙ぐんだ。桐子さんは自分の病気は簡単には治らないことを話した。慎一はジツト聞いていた。

桐子さんの施薬の内容を聞いてみた。薬は慎一も知っている薬の他にも服用していて、その服用量の多さに内心驚いた。だがその事は黙っていた。桐子さんの病状の重さに今更ながら衝撃を受けていた。これでは健康な臓器への副作用は計り知れないだろうと思った。やがて桐子さんは

「今度の日曜日私と一緒に行って貰いたい処があるんやけど」

少し笑顔が戻ったようだった。

その日は秋の爽やかな冷気が慎一の頬を撫でて過ぎた。

丹波市の駅から約束通り奈良行きの一両目に乗った。桐子さんは既に窓際に乗っていた。初めて見るスーツ姿だった。隣に座わると微かに香水の匂いが鼻をくすぐった。眉の下に薄くシャドーが塗られ唇には紅を差していた。藹長けた女性の姿に慎一は圧倒されていた。

電車が動き出しても桐子さんは外を見たまま黙っていた。

やっとアナウンスの「まもなく終点の奈良です」と聞こえると

「修行中のあなたを連れ出してえんかしら」

「いいんです。大丈夫です。全然構いませんから」

桐子さんは笑った。それを見て慎一はやっと安堵した。たとえ修行中でも服部さんからなんと叱られてももう慎一は自分の心の命ずるままに生きることに決めた。それでも修行は決して疎かにはしないと誓った。

奈良から関西本線の加茂行きに乗った。

「こんな病気になった御陰で私の心は終戦で止まってしまったの」

「どうですか？」

「それ以上聞かんとして」

桐子さんは寂しそうに流れる風景を見ていた。慎一は身もだえしたくなるのをこらえていた。自分だって絶望的な状況からこうして元気になったのだからきつと桐子さんだって希望はある筈だ。そう伝えたかったけれど言葉で表現できなかった。ぎゅっと抱きしめて気持ちを伝えたいけど拳を握って耐えていた。

加茂駅に着くとバスに乗り慎一も従った。なだらかな奈良の山野が何処までも広がっていた。バスは起伏のある山道をユックリと進んだ。やがて寺前の停留所で桐子さんは降りると慎一を小道へ連れて行った。小道は万葉の往時が蘇るかのように侘びた景色が続いてそこに石仏が葉陰に隠れていた。仏様は微笑んでいた。誰が手向けたのか鮮やかな切り花が添えられていた。

「私はこの風景が好きなの」

と桐子さんが言った。心安まる眺めだった。やがて浄瑠璃寺の山門を入った。少し歩くと全景が広がっていた。慎一も思わず叫んだ。

「まるで浄土みたいだ」

二人は立ち止まって見入った。慎一も息をのんで見続けた。池の向こうに小さな三重の塔が少し傾いているかのように建っていた。その姿が浄土信仰をそのまま映していた。二人は近づくとも自然と頭が下がった。朱色に塗られた木組みもよく見ると匠の振るった削り跡がそのままの素朴さだった。平安の信仰がいまだに息づいていた。池を巡って本堂に入ったら等身代の阿弥陀様がずらっと並んでいた。

二人のほか誰も居なかった。仄暗い堂内に麝香の香りが満ちていた。格子越しに池と三重の塔が見え時代が自然と昔に遡った。

慎一は思わずしがみつくように桐子さんに抱きついた。細い折れるような身体だった。

桐子さんが抗うので慎一はぎゅっと抱き締めた。唇が合わさった。

長い時間が流れた。

突然、桐子さんが膝から崩れて足元に蹲った。驚いた慎一は急いで桐子さんの身体を床に横たえた。息遣いが荒く顔色が真っ青だった。狼狽えた慎一は救急車を呼ばなければ、と思った時桐子さんの左手が慎一のジャンパーを掴み右手で拝む仕草をしながら「このままにして」というような動作をした。慎一は桐子さんの頭の下にバッグを差し込み様子を窺った。暫くして徐々に顔色が蘇ってきた。

桐子さんは静かに立ち上がった。

「ゴメンナサイ」

慎一はしっかりと桐子さんを抱きかかえ

「僕がきつと治してみせます」

と言った。桐子さんは微かに頷いたように見えた。慎一は念を押すように

「きつとです」

「わかったから」

桐子さんはようやくやく歩き出し、それでも丹念に阿弥陀仏を一体づつ観て回った。慎一は思いがけない桐子さんの様子に動転していた。なんとか自分の気持ちを伝えたかったけれどそれ以上言葉がみつからなかった。桐子さんは寺を出るとき立ち止まってもう一度振り返った。

「来てよかったわ」

慎一はそれを聞いてやっと安堵した。

桐子さんを守りたいと思っただけど自分には何の力もないことが情けなかった。何もしてあげられないことが歯がゆくてならなかった。

二人は自然と小道の方へそろそろと歩いて行った。なだらかな道の両側には照葉樹林が続いていた。林の中ほどに陽が差し入って葉叢の陰に柔らかな芝草が広がっていた。

桐子さんの額に汗が浮かんでいた。

「少し休みましょう」

慎一は手を添えて芝草の上に桐子さんを座らせ自分もその横に座った。

密やかに風が吹き通って二人の頬を撫でた。

「あなた病気移るわよ」

「大丈夫です」

「どうして」

「桐子さんが病原菌を排出していたら自宅療養も出来ないし第一隔離されるでしょう」

「さすが同病者ね」

「僕もそんな人をたくさん見えていますから」

「そうなんや」

桐子さんは伸びをするように背中を芝草に投げた。慎一も真似をした。

「お互い厄介な病気になったもんね」

「同感です」

「病んで残った排気量の限界でしか生きていけないなんて」

「そうです」

「全く歯がゆいったらないわ」

二人は空を見た。

樹林の先に鈍い午後の光が茜色に染まっていた。

「私はねえ、超一になりたかったの」

「えっ」

「一遍上人についてゆく尼さん」

「一遍上人？」

「私はそんな人を探していたのに」

「すいません」

「いいのよ、世の中って少しも想うようにいかへんのやから」

二人は帰路についた。
翌日図書館へ行って一遍を調べた。十歳で母を失い出家してから全国を行脚して踊り念仏で民衆を鼓舞した聖であった。一遍には超一という尼僧とその子がいつも一緒だった。そんな偉人であることに慎一は恐れ入った。
それと同時に桐子さんの病状は思いのほか深刻であることに気が滅入ってしまった。なんとか助かる道はないか慎一は考えた。

九

それからなんども逢った。
その度に恋しさが募った。頭の中は桐子さんで一杯だった。けれどどうしても卒業して免状を名古屋の若奥さんに見せなければならぬと思っていた。それがせめてもの教会への恩返しと思っていた。免状があると全国の教会の祭壇に登って祭事をする資格と祈禱を施す資格が得られた。しかし今の自分は桐子さんだけだった。
学館へは毎日皆と一緒に通学していたが夢遊病者のように移動してただけだった。
これから先どうしたらいいのかさえ見当が付かなかった。

木枯らしが吹いて枯れ葉が通学路に舞い散る頃になって突然桐子さんとの連絡が付かなくなった。心が半狂乱になって何度も直通階段を登ってインターホンを鳴らすのだが返事はなかった。神様にも祈った。早朝参拝の他に毎夜食事が済むと神殿へ行って祈った。
或る日、同室の二人が歩いてきた。「急にどうしたの」と尋ねると今度は前を塞いで「ついてきな」と言った。街の裏手は水田が広がっていた。街灯もなく真つ暗な道でその横には水田へ水を引く水路が走っていた。
急にその水路に突き落とされた。水嵩は膝程の水位で激しく流れていた。そこを歩かされた。木村さんが

「お前一番若いくせに何してんのや」

近藤さんは

「教会付の教導師見習いが夜になると何処ほつき歩いてんのや」

二人は同級生から聞かされたと子細を執拗に尋ねた。教会からの依頼だと伝えるとやっと水路から上がることを許されたがそのかわり暮れに一人ずつ全校生徒の前で読み上げる「自分を語る」原稿を二人分書けと約束させられた。膝下のすりむいた傷がヒリヒリと痛んだ。

農場の服部さんにはとても会うことは出来なかった。罪悪感が身を責めたが慎一は人間として胸を張っていたかった。

ますます桐子さんの寂しげな顔が胸に迫って眠れなくなった。

とうとう我慢が出来なくて神具店の左側の玄関から会いに行った。お母さんはあっさりと通してくれた。

「大変だったのよ。救急車を呼んだりして」

お母さんは子細を聞かされていないことが分かり安堵した。部屋に通ると桐子さんはベッドに寝ていた。頬がこけていた。

慎一は胸が熱くなったが何も言えなかった。桐子さんは起き上がろうとした。

慎一は駆け寄って助け起こした。その手が自然と胸に触れた。胸は手のひらに隠れるほど優しくかった。その大きさがたまらなく好きだった。何時までもそうしていたかった。

「あんたに連絡つかんかった。駄目やわ」

「ごめんなさい。僕だって気が狂いそうだった」

連絡がつかなかった桐子さんは急に呼吸不全になり容体が急変した。

慎一は情けなかった。桐子さんの一大事に何もしてあげられない。無力感が襲った。

桐子さんが安心してくれるような方法がないか考えたけれど良い案は浮かばなかった。馬鹿でどうしようもないと頭を殴り続けた。

「僕は一生桐子さんの側にいます」

感極まってそれだけを伝えた。

桐子さんは目を見開いてそれを聞いていたが

「ウフフ、無理せんでもええよ」

「いや、絶対やります」

「その前にすることがあるでしょ」

「なにを？」

「卒業したら名古屋への報告があるでしょ、それが済んだら東京へ帰りなさい」
「えっ」

「あんたの家族はあんたを必要としてる」

「それなら桐子さんも一緒に」

「私のこと？」

「ええ」

「私にはぐれ者やから」

「僕だって同じじゃないですか」

「無理よ」

「僕だっていつまでも子供じゃありません」

「あああ、ああ、もう一度」

「もう一度、なんですか」

「この身体が悔しいわ」

桐子さんは寂しく笑うと天井を見上げた。

十

穏やかな日々が続いた。と言っても桐子さんの病状が好転したわけではなかった。桐子さんの病名は粟粒結核と言って肺の全面に粟のように病原菌がはびこり、一方が回復すると他方が浸潤してなかなか全面的回復が覚束ない難病であった。治癒するのに長期の投薬と精神の強さが求められた。

慎一も規則通り通学を続け夜になると神殿に行つて祈りを捧げた後、毎日桐子さんの部屋に通つた。母親は天道教の信者なのでそのことを理解してくれたが本人は決して天道教の話はしなかった。丁度病氣以前の慎一に似ていた。そのかわり桐子さんは絵画が好きでよく画集を集めていた。ある時、雪舟の絵を見せて

「これ位の覚悟がなければ信仰は無理ね」

見ると壁に向かって目を見開いている達磨に自らの切り落とした左手を差し出して入門を請うている慧可断臂図であった。

「面壁の達磨はなかなか入門を許さへん。遂に慧可は自らの手を切つて差しだしやっと入門を許されたのよ。私に構っているようでは駄目。東京に帰りなさい」

慎一は目を見開いてその絵を見続けた。慧可の目には涙が光っているように見えた。荘厳厳粛な絵であった。慎一の心を見透かしているようだった。

「僕は宗教家になるより在家の信者として生きる積もりです」

慎一の心は乱れていた。どうして良いか分からなかった。唯一、桐子さんといると安心していられた。このままずっと続いてくれると一番いいと慎一は想つた。残念ながら信仰よりも桐子さんだけだった。心は破戒坊主の成れの果てだった。それでも無残とは思わなかった。ただ桐子さんの病気が治つてくれればそれでもいいと思つた。少しも澄んだ境地は得られなかった。木曜の本殿清掃には長い回廊の板を乾いた布で汗が飛び散るほど磨き込んだ。板は厚さ拾糶を越えて五十畳以上も続いていて薄暗がりの中に光っていた。

慎一は教祖の口伝をまとめた「御筆先」と称する秘儀を名古屋にいた時から繰り返し口誦していた。教祖の脳裏に降臨する天上の声を教祖がまとめた口伝書である。そこには道元のような難解な文章は一つもなく人間の律すべき行動の諸範を記しているので平易であつても行動することは非常に難儀であることに変わりはない。

決めたことは直ちに実行する。ただそうやって此処まできたらいつのまにか慎一の身体から病気が失せていた。その不思議な縁に慎一は戸惑っていた。どうすべきであるのか。桐子さんと同じ病状の人を慎一は千葉の療養所で既に知っていた。その人は隔離病棟から遂に大部屋に戻ることは出来なかった。

そうした患者はどうすれば良いのか。むしろ安らぐ束の間があるならば人間らしく生きることを否定されるべきではないと思った。慎一は自分の寄る辺ない日々の哀しみを思いだしていた。その時の砂を噛む虚しさは誰にも味あわせたくない。

桐子さんを思う時それらのことがまざまざと蘇ってきた。桐子さんを置いて東京に帰るなど到底出来なかった。

次の日も桐子さんの部屋を訪ねた。

桐子さんは学寮の夕食を食べずに来たことを察すると隣の炊事場で包丁の音が聞こえた。暫くすると簡単な食事を作ってくれた。学寮の食事とは雲泥の差があった。卵焼きでも違う味がした。御飯は何もなくとも食べられる程旨かった。修行を忘れてしまう程幸福な気持ちになった。満腹が濃密な雰囲気を醸し出した。それでも桐子さんは「東京へ帰えりなさい」とこの日も呟いた。その言葉に慎一の心に火が点いた。

ベッドに飛び乗った。だが桐子さんを押さえつけるとゆるやかに桐子さんを抱いた。激情は走ったが桐子さんの発作が起きないように両手で二人の間に空間を作った。

「一人では絶対に東京へは帰らない」

興奮して叫ぶと二人は息を整えるまで見つめ合った。長い沈黙の後桐子さんはゆっくりとベッドから起き上がり

「そないなこと出来へん」

「自分を見習えば貴女だつて」

「わてなんて到底無理」

「無理が通ればそれこそ自由でしょ」

「わての病気はそれ程甘もうないんや」

「じゃどうしてほしいんですか」

「わてから言うことやない」

「じゃ治らなくてもいいんですか」

いきなり慎一は平手打ちを受けた。

「阿呆。宗教なんて人間の願望にすぎんやないの」

その言葉を聞いて慎一は急に元気だった頃に母親をよく訪ねてくる定婆さんを思い出していた。あの頃慎一は定婆さんを正直嫌っていた。世間知らずの母親に目先の利益をちらつかせて宗教に引きずり込むペテン師と思っていた。宗教では世界を救えない、そう堅く慎一は考えていた。その理屈しか信じない慎一が突然病気に襲われた。その時理屈だけでは解決できない現実には悩んだ慎一が藁をも縋る思いで飛びついたのが定婆さんだった。理屈の破綻の先に宗教が現れその宗教が新しい道を開いてくれた。これは慎一の合理では測れない道だった。慎一は今合理と非合理の狭間で立ち往生していた。

いっそ信仰に絡め取られた身ならばもう一度信仰によって奇跡を呼び起こして貰いた

い。そんな思いで慎一は桐子さんの回復を神に願い出た。

十一

翌日から学寮と教室を往復しながら神が聞き届けてくれることを願った。ただ金曜日の農場へは行けなかった。その時だけ中学校を抜け乗鞍古墳まで行き池の周りを当てもなく歩いては帰ってきた。頭の中は桐子さんで一杯だった。

その服部さんが学寮にやって来て手紙を置いていった。担当者からそれを受け取った時とうとう来るものか来たと思っただ。文面には「何時でも良いから農場へ寄ってくれ」とそれだけだった。言われれば逃げるわけにはいかなかった。

服部さんは珍しく算盤を弾きながら帳簿を付けていた。

「この間、桐子さんのお母さんが来やはった」

お母さんと聞いて慎一はドキリとした。服部さんの次の言葉を待った。

「あんたにもう桐子には会うてくれるな、と言われた」

「そんな」

「桐子の身体に良いことはちつともないて」

と服部さんが言った。慎一は言葉を失った。

「あんたを薦めたのは私やからね」

思わず慎一は叫んだ。

「待つて下さい。僕あの人と結婚させて下さい」

「何言うてんのや、あの人病気なんやで」

「昔あの人と同じ病状の人をよく知っているんです」

「尚更おかしいじゃないか」

「あの人の病状は現代の医学でも治せないんです」

「えっ、そうなのかい」

「だから側にいてやりたいんです」

「変な理屈やないかい」

「治せないなら一緒に生きるしかないでしょ」

「それなら医者の方が適任やろ」

「違います。医学は対象療法にすぎません。あの人の方が大事でしょ」

「えっ」

「服部さんからお母さんに言って下さい。僕が此処で治ったように桐子さんを治します」

「そんなことお母さんが承知するわけないやろ」

「桐子さんを僕の信仰で治せないなら僕は只の偽者じゃないですか」

「まあ待て。これ位で宗教を試さんでくれよな」

話は膠着状態となり服部さんの預かりとなって二人は別れた。

秋になって講堂で学生一人一人の「自分を語る」授業が全学生の前で披露された。木村さんと近藤さんは慎一の書いた原稿をつかえながら読み上げた。慎一は信仰と不治の病との相克を真剣に訴えた。学生の間から熱の籠もった反応があった。

十二月になって殆どの学校は冬休みになるのにこの学校に冬休みはなかった。慎一は服部さんからの連絡もなく、と言って奈良や京都にも行けず、ましてや桐子さんを訪ねるのも憚られた。ジットしていられなくて市内の石上神宮や夜都岐神社や柳本まで足を伸ばして黒塚古墳や長岳寺、崇神天皇陵などを見て回った。部屋には同室の者がいるので慎一は神殿に行つて仄暗い隅に座つて蠟燭の灯の揺らめきを眺めて時を費やした。参拝者は途切れることなくやってくるが、それらを遠景にしてかすかなざわめきと堂内の暖かさが安心と安らぎを慎一に与えてくれた。それが救いだった。

そんな或る日神具店の小僧さんが一通の手紙を学寮に届けてくれた。差出人は桐子さんからだった。文面は「今度の土曜日十一時三十分発奈良行き一両目で待つ」

駅は丹波市駅に決まっていた。前の時の列車と同じだった。慎一に元気が戻った。自分が此処で学んでいる以上この道を歩むほかない。その先は神が決めてくれるだろう。慎一がこうしていられるのは正にこの信仰の御陰だとするならばこの先も指し示してくれる筈だ。そう信じる他はない。

土曜日、列車には桐子さんが既に座っていた。慎一は黙って隣に座わると左手で桐子さんの右手を握った。桐子さんは前より痩せていてそれが気がかりだった。結局何も話さないまま奈良に着いた。

駅を下りると桐子さんは迷わずタクシーに乗った。

「国立奈良病院と高等学校の前を通過つて蕎麦屋の観で停めて」

運転手は心得た感じですぐ発車した。広い通りには新聞社や電力会社の大きなビルが建っていた。程なくして運転手が

「病院と高等学校が右手に見えますよ、停めますか」

「そのまま行つて」

やがて右手に巨大な病院と樹々に囲まれた古びた高等学校が見えた。速度を下げてゆっくりとその前を通り過ぎると次の十字路を左に切った。ほどなく「観」と書かれた蕎麦屋の前で車は止まった。

白地に大きく「観」と書かれた旗のような垂れ物が下がった重厚な白壁の店だった。

桐子さんは鴨南蛮を頼み慎一には天井を注文した。天井は頬が落ちるほど旨かった。

「学校時代時々来たの、懐かしいわ」

「さっきの学校桐子さんの」

「そう、友達の顔が浮かぶわ。結局一年しか通えなかった。」

「どうして」

「戦争よ」

桐子さんは未練を断ち切るように店を出た。

目の前は広大な奈良公園が広がっていた。二人は鷺池の畔に出ると中之島を通り橋を渡って浮御堂に座った。春ならば満開の桜が今は葉を落として霜枯れた静かな風景が広がっていた。慎一は物珍しげに辺りを見渡した。突然、桐子さんが驚いたように声をあげた。

「わああ、きれいな手えしてはるんやね」

名古屋で毎日山を削って土地を均していた手は決してキレイと言われるような手ではなかった。桐子さんは黙って自分の両手を差し出した。一瞬見間違ったかと思っても一度シツカリと見つめて驚いた。桐子さんの両手には掌紋がなかった。烏賊の肌のようにツルツルしているが所々自然とは思えないへこみが深く刻まれていた。決して重労働で鍛えられた手とは別段の痛ましい労役の痕跡がまざまざと残っていた。

「ひどいですね」

「私の青春」

「どうしたんですか」

「どうしたわけかあなたに聞いてほしいと思ったのや」

桐子さんは話し出した。

「女学校から突然学徒動員で大阪の紡績工場へ連れて行かれたんや。昼夜交替で落下傘の縫製をやらされとった。毎朝寮から隊列を組んで「鬼畜米英」を唱和しながら工場のミシンを歩み続けたのに昭和十九年十月十五日に突然作業が中止になった。一同は「キット動員解除になって家に帰れる」と期待しとったのに十月二十五日全員食堂に集められて担当士官が十名単位で三組三十人の氏名を読み上げ私もその中におったんや。士官から一人ずつ胸につける胸章を渡された。突然呼ばれなかった生徒が騒ぎ出した。胸章には桜の花ビラがあしらわれてとてもキレイだったから皆も単純に欲しがっただけやった」

担当士官が大声を張り上げた。

「静かに、これは重要使命の動員である。御国に尽くすべき仕事は次々とあるんだ」

一同は既に声を失っていた。

「一旦帰宅を許されて改めて出発と思っと思ったら翌日軍用トラックで駅まで運ばれホームには既に列車が待つとった。列車はすぐ出発し窓は全て遮蔽されていて何処をどう移動し

たかは分からなかった。皆は薄暗い照明の下で顔を見合わせて緊張に耐えとったわ、列車は二時間ほど走り詰めで止まった。下りてみると名古屋駅やった。今度は私鉄に乗り換え。ふと列車の横腹に「緊急」と書かれた札を見て皆は顔を見合わせた。声にならない分緊張が走ったわ。私は知らず知らず胸の胸章を触とった。皆な声を押し殺して座席に座った。士官は無言で携帯画板に書き込みをしとった。今度は二十分足らずで着いた。案の定軍用トラックが待っていて休む間もなく動き出した。やがて車は門を入り大きな工場群を抜けると奥まった一画に止まったの。迷彩色を施した工場隣の隣にある木造建屋に入ったら食堂だった。名々の前におむすびが置かれて遅い昼食を食べたわ」

驚池の畔に出るとさすがに十二月の風は冷たく落葉した樹々の枝をならした。二人は博物館を抜け依水園に入った。水心亭で暖をとり茶を啜った。冷えた身体に茶の温かさが心をも潤した。

桐子さんがほっこりと笑った。

「どうしたんですか」

「こんな話をしているのにとっても身体の調子がええの」

「そういえばいつもより顔色が良いですよ」

「どうしてもこの話をしたかった」

「わかりました」

「あんたは縁故疎開だからこんな話は想像もつかへんわね」

「ええ、女性も働いていたなんてビックリです」

「男性が戦争に取られてしまうたから内地の銀行員や床屋、車掌は皆な女性だったんよ」

「女学生までもですか」

「日本中根こそぎ戦争だった。十一月十日には女子挺身隊まで一年延長が決まったわ」

「こっちは戦争に負けてからずっとお腹が空きっぱなしですよ」

「そんな人にこの話をどうしてもしておきたいんや」

桐子さんは話の続きを始めた。

「名古屋に着いた翌日全員食堂に集められて報道映画を見せられたの。驚いたことに此処へは私達の他全国から三百名も集められていたのよ。神風特別攻撃隊の出撃場面だったわ。関行男大尉が水杯を交わして飛んでいった。続いて十人も行ったのに一人も帰ってこなかった。「海ゆかば」が流れると皆な声を出して泣いたわ。これじゃ落下傘なんているわけないと思った。それが今度は風船爆弾になったの。始めどうしてこれが秘密指令なのか分からなかったけど最後は細菌兵器を積む予定だったことが戦後わかったわけ。とにかく日本は切羽詰まっとったんやね。でも神風を見せられて私達だって御国のために命を投げ出す覚悟やった。そうは言っても飛行機で飛び出すわけやなし力仕事だし身体中泥だらけで一日中へとへとになって精も根も尽きてしもうた。つくづく戦争って辛いだけだった。風船の材料は楮という樹の皮から作った和紙なんだけどこれが全国から列車で届くのよ。その和紙を糊で何枚も貼り重ねなきゃ空中に浮き上がるための水素が漏れてしまうから命懸

けだった。漏れると何度も塗り直しが辛かった」

そこで桐子さんはお茶を啜った。思い出すのが辛いのか暫く庭園を眺めていた。

「一番最初は糊づくりからだったわ。午前三時に全員整列して工場に行くとき大きな水槽に蒟蒻の粉と水を混ぜて攪拌するの。その内粘ってきて棒に余程力を入れんと動かなくなつて腕がもげそうになるんやけどとにかく神風を見せられてから泣き言が言えんしね。充分練れてくると今度は防腐剤にホルマリンを混ぜる工程で、すぐ気化するしこれを間違つて吸つたらもう大変、窒息する位苦しくなるんや。その上、薬品だから手がツルツルになつて穴が空くかと思うほど痛くなつてくるんよ。それでも神風がいたから我慢するしかなかったわ。最後に蒼い着色剤を入れてやつと作業を終わってみると一日中水浸しだったから死ぬ程身体に堪えとつた。これで肺をやられたと思うの」

「本当ですわ、しかも本土空襲もあるから休むわけにはゆかないし」

「そうやね、とにかくアメリカ迄飛ばすには冬の偏西風に載せなければ届かへんから軍だつて必死で追い込むんや、全く辛かったわ」

私達はお茶と饅頭を追加して身体を温めた。

「次はいよいよ風船作り。直径十メートルもあるから何しろ和紙が大きくてね。上下に分けて最後につなぎ合わせるとして始めは張り板を使ったけど能率が悪い上に河原まで持つて行く手間ですれだけでヘトヘトになってしまつて軍の研究所も回転乾燥機を考案したわけ。鉄製の箱の中にパイプが通つていてそこにボイラーから蒸気を封入するんだけど時々繋ぎ目から漏れて大火傷して怖かつたわ。工場には三百台も並んで一斉に動き出すから一日中追いまくられるし、どうしても生徒同士の競争になつてとにかく必死だったわ。左手で和紙を押さえながら右手で次々と糊を塗つて行くので足元に糊が落ちるのを構う暇もないから靴下や靴が糊まみれになつて足が動けなくなつてしまうのよ、最後は皆な裸足やつたわ。傍で見たら滑稽だけど特攻隊に続けと髪振り乱して作業に没頭しとつた。今考えると本当に何故か悔しい気がするんよ。こんなに頑張つたのに全く報われることなしに終わったことがね、つくづく戦争なんて何故やつたか分からん」

「女学生が勉強もしないで女子挺身隊なんてどこか哀しいですわ」

「それも肝心な風船爆弾を飛ばす所を見たこともないんよ」

「そうですわね」

「最高機密作戦やつたからね私達には知りようがなかったわ」

「実に情けないですわね」

「情けないのは今の方がもっと情けないわ」

「えっ、今ですか」

「だってあの時は懸命に働いていたやらないの」

「今は病気だから仕方ないでしょ」

「それが悔しいやないの、あんたは元気になったから良いやん」

「そうですわね」

「このまんま死にたくないや、病気で死ぬなんて」

「待って下さい、そう決めつけないで」

「なんか意味を見つけなければ死に切れん」

「そうだ、さつき風船を飛ばす処見たことがないって」

「そうなの、折角死に物狂いで作ったのに」

「本当に飛んだんですか」

「本当よ、しかも九千三百発も飛ばしたのよ」

「それは何処ですか」

「茨城県の長浜、そこを基地にして海水からでも水素を作れる工場を作って」

「知ってたんですか」

「戦後調べた。一生懸命探したんや」

「そこへ行きましようよ、桐子さんの青春の証じゃないですか」

「ああそうね」

「そしてそこに桐子さんたち挺身隊の記念碑を建てたら」

「えっ、そんなこと思いつきもしなかった」

「そこを桐子さんの再出発とするんです」

「再出発？」

「そう、惨めだった青春から戦後を生き抜くんですよ」

「そうね、挺身隊の碑は本当に作ろう」

「そうですね、やりましよう」

「私、結婚して会社作った時の株券を持つてるの、それ使って」

「使ってって、桐子さんもやらなきゃ駄目じゃないですか」

「勿論やる積もりやわ」

「それが桐子さんの戦後なんだから」

「そうね、再出発ね」

二人はしっかりと見つめ合った。

十二

それが桐子さんとの最後の別れとなった。

雪がしんしんと降り積もった一月の半ば食堂で朝食を食べていた時神具店の小僧さんが門前に現れた。

「急いで家に来て下さい」

慎一は胸騒ぎがしてそのままかけだしていた。小僧さんが後からついてきた。雪が顔にかかって視界が塞がれたがかまわず駆け続けた。神具店に着くと横の階段を駆け上って構わずドアを開けた。部屋の前で息を整えてから静かに扉を開けた。母親がベッドの脇を空けてくれた。枕元に立つと桐子さんが手を差し出した。

慎一は手を握ると思わず「ワッ」と泣き叫んで名前を呼んだ。

桐子さんの顔に安堵の表情が浮かんで二度頷いた。

しかし桐子さんの手の応答が少しずつ薄れていった。慎一は両手で握り返した。桐子さんの目に涙が浮かんだ。それが一筋頬を伝って流れているうちに息が途切れてしまった。

「い」臨終です」

その声と同時に部屋中に泣き声が広がり慎一はその場にへたり込んで泣いた。

葬儀には全て末席に座って見届けた。一通り終わるとやっと一人きりになり桐子さんと向き合えることが出来た。夜には神殿に行つて仄暗い闇の中に身を沈めた。

次の日も慎一は神殿に通つた。片隅に座つてこの世に桐子さんが居ないことは絶対の事実と知つた。人間は死ぬばもう終わりなんだ。この信仰は死んでもまた生まれ変わる「世直り」の思想が「御筆先」に書かれている。それがこの宗教の希望だった。

しかし死んだら全てが終わりであることが今それだけが慎一を捉えて放さなかった。慎一は当てもなく街へ出た。はずれの庇の傾いた店先に狸の置物がある古道具屋に入った。棗ほどの大きさの茶入れが目についた。手垢にまみれた紐付きの箱もついていたが残念なのは縁が欠けていた。その分値段が安かつた。慎一は思案の上それを買い求めて気が残が落ち着いた。急いで寮に帰ると火葬場で分けて貰つた桐子さんの骨を押し入れから取り出すとその茶入れに収めた。それを抱いて神殿に向かつた。これでやっと気持ちの整理がついた。神殿は香が炊き込められ定位置に座ると慎一は瞑目した。

桐子さんの居ないことが身にしみて寂しく泣きたかつた。けれどこれでやっと丹波市を離れる決心がついた。生きることはきつと泣きながら歩いてゆく他ないのだと思つた。

桐子さんの生涯は国家とそして家への忠誠によつて二十才に届かず骨になつてしまつた。人は自ら望んだ生き方を自分の意志によつて自由に生きられる世の中にしなければならぬ。桐子さんの希望はそこにしかない。

慎一はその希望をたとえ困難であろうとも受け継がなければならないと決意した。その為にはまず自分の人生の構築をしなければならない。行く手は厳しく果てしない。それでも前に進まなければ桐子さんの無念を晴らすことは出来ない。東京へ帰ろう。全てはそれからだ。

完 2020/12/08

参考文献 「女学生の勤労働員と学童疎開」鳥居民著 草思社